

「エクエ・ヤンバ・オー」とは

本書の表題「エクエ・ヤンバ・オー」とは、「神よ、御名のたたえられんことを」といった程の意味である。もともと、かつてアフリカ西岸のナイジェリアにあったヨルバ王国で話されていた言葉にほかならない。この言葉は、ヨルバ語もしくはルクミー語と言われるけれど、ヨルバ人が、コロンプスによるアメリカ大陸発見以後、奴隷としてキューバやハイチ、ブラジルに移住させられるとともに、それぞれの国に定着していったのである。

ここでいう「神」は、キリスト教の神ではない。アフリカ由来の呪術的な信仰の神と、スペインから移植されたカトリック教が表裏一体になったものなのだ。この宗教は、キューバではスペイン語でサンテリア教、ハイチではフランス語でヴードゥー教、ブラジルではポルトガル語でカンドンブ

レ教と呼ばれ、それぞれ名称が異なっている。このなかでは、死体のまま甦った人間が跳梁跋扈する、おどろおどろしいゾンビ伝説とつながりのあるヴードゥー教が、わが国ではいちばんよく知られているであろう。そういえば、作品中には、主人公メネヒルドの従兄アントニオが、墓場でまだ成仏していない死体を買ってきて、それを使って敵に立ち向かわせるといふ話が挿入されていることが想い出される。

また、メネヒルドが秘密結社員ヒヤクニゴになるための十八時間にわたる加入儀礼が描かれているけれど、この黒人の相互扶助組織はヴードゥー教と切っても切れない深い関係で結ばれている。目隠しをされたメネヒルドの身辺にいよいよ神があらわれるときに、むかしアフリカのギネアでも立ち会ったというものどもが、地下からぞろぞろ這い出してくる。「言葉を話す柱や、ものによじ登る頭蓋骨、歩きまわるはらわた、角のある呪術師、雨ごいびと、占いができる毛皮」がそうだというから、ゾンビ伝説ほど怖気をふるうことはないかもしれないが、こうした線を押すすめてゆけば、きわめて似通った世界が現出することは確かであろう。

ハバナ・プラド街一番地

『エクエ・ヤンバ・オー』の末尾には、「一九二七年八月一日―九日、ハバナ刑務所」と、日付が記されている。

アレホ・カルペンティエールは一九〇四年の生まれ（一九八〇年没）なので、弱冠二十三歳のときに処女作の小説に手を染めたことが分かる。しかも場所が場所というか、七カ月間、政治犯として収容されていた刑務所の中だから、徴収した税金を着服したかどで収容された、セビリアの監獄のなか

で『ドン・キホーテ』の構想を練ったセルバンテスを彷彿とさせるものの、驚きを禁じざるをえない。いったい何が彼の身にふりかかったのか。

じつは、当時、独裁政を敷いていたヘラルド・マチャード大統領に反対する〈少数派宣言〉Manifesto de Grupo Minorista なるものに署名したのが発覚し、共産主義者として告発され、収監されたのである。宣言は、「自国の芸術、一般にさまざまな宣言に見られる新しい芸術を支持する。公共教育の改革を支持する。キューバの経済的な独立を支持し、アメリカ帝国主義に反対する。世界、アメリカ大陸、そしてキューバにおける独裁政に反対する。ラテンアメリカの連帯と団結を支持する」という若者らしい向こうみずで意気軒昂な内容であった。

カルペンティエールは、一九七七年、あまり気乗りしないままハバナの〈芸術と文学〉社から再刊した『エクエ・ヤンバ・オー』に添えた「序」のなかで、こう述べている。

一九二七年、マチャード政権の警察に逮捕されたわたしは、ブラド街一番地にそびえていた刑務所（そのいまわしい建物は、当時、ハバナのブルジョアが好んで散歩する美しい並木道に位置していたが、考えてみれば、シュルレアリスムめいた突飛なとりあわせである）における監禁生活のつれづれに、やがて処女作の小説となる『エクエ・ヤンバ・オー』を書くことを思いついた。修業時代というのは不安、困惑、迷い、躊躇がつきまとうものだが、この本にもそうしたものが顔をのぞかせている。

このときの半年余りの監獄体験が、小説の主人公メネヒルドが、恋に落ちた若妻ロンヒーナのため

に、大男の亭主ナポリオン殺人未遂事件をひき起こして逮捕され、首都の刑務所に護送されたあと、そこでくり広げる繋囚の自堕落な暮らしを描くさいに大いに生かされることになる。

フランス亡命とシュルレアリスムの洗礼

一九二八年三月、カルペンティエールは、ハバナで開かれた第七回ラテンアメリカ・ジャーナリスト会議に、ブエノスアイレスのラ・ラソン新聞の代表として出席していた、フランスのシュルレアリスト詩人ロベール・デスノスのパスポートと取材許可証を借りて、出航まじかのエスパニーニャ号に乗り、キューバを脱出。フランスのサン・ナゼール港に着くと、在パリのキューバ大使館員マリアーノ・ブルルの計らいで、ぶじ念願の亡命を果たすことができた。フランスは建築家だった父親ジョルジュ・ジュリアンの母国であった。ちなみに母親リナ・ヴァルモンはロシア人で外国語の教師をしていた。

以来、一時帰国をはさんで、一九三九年まで、足かけ十一年にわたってパリで暮らした。そのころは、アンドレ・ブルトンがシュルレアリスム宣言を出して五年ほどがたち、シュルレアリスム運動の機運が高まった時期であった。カルペンティエールは、まもなく『ドキュマン』や『ピフール』といった前衛雑誌に寄稿し、ブルトンに招かれて『シュルレアリスム革命』誌に記事を書くようになった。パリでスペイン語で発刊されていた『磁石』という文芸誌の編集長代理をつとめたこともあった。まさに彼自身のいう修行時代の始まりであった。

そのうち、シュルレアリスム関係の、ルイ・アラゴン、トリスタン・ツアラ、ポール・エリュアール、バンジャマン・ペレといった詩人や、キリコ、タンギー、ピカソといった画家、さらにはヘミン

グウェイ、ガートルード・スタイン、ジョン・ドス・パソスといった〈失われた世代〉のアメリカ人作家の知遇を得て、見聞を広めていった。

そして、一九三三年、二十九歳のとき、パリ滞在中に『エクエ・ヤンバ・オー』の決定稿を書きあげ、「やがて名声をはせることになるルイス・アラキスタイン、ファン・ネグリン、フリオ・アルヴァレス・デル・ヴァーヨという三人が創立したばかりのマドリードの」エスパリーニャ社から発表したのである。

シュルレアリスムに至る前衛的な思想の流れ

前述した「序」のなかで、カルペンティエールは、前衛的なものがたどった流れを次のようにまとめている。

一九二〇年から三〇年にかけて、前衛という言葉は、意外にも政治的な文脈から切りはなされて、ある期間、新しい意味をあらわすことになる。新しい思想がめばえると、(……)批評家と理論家は、既成の美的規範——すなわち、アカデミックなもの、公式なもの、趣味のよいブルジョアに好まれるもの——を断ち切るすべてのものを、前衛と評するようになった。

こうして、世界各地でさまざまな前衛的なイスマ、つまりイスマが生まれた。イタリアの未来主義、ロシアのシュプレマティスム、パリのキュビスム(第一次世界大戦以前のそれ)について、一九一七ごろ、チューリッヒでダダイスムが誕生した。それからまもなく、スペインの超絶主義ウルトライスマがうぶ声をあげるが、この運動の影響はやがて、一九二二年から二三年以降、ラテンア

メリカに飛び火した。おかげで、メキシコの騒乱主義（この主義では、マヌエル・マブレス・アルセ、アルケレス・ヴェラといった詩人がとくに注目すべき存在）、それに、おおむね前衛主義的な色彩がうすめられたイスマスが、〈舳先〉、〈プロペラ〉、〈頂点〉、〈螺旋〉といったブエノスアイレスの文芸誌や、何の気とりもなく〈前進評論〉（あえて〈前衛〉ではなく、〈前進〉としたもの）と名づけられたハバナの雑誌に登場した。いっぽう、そうした運動の法典が姿をあらわし、広く読まれた。スペイン語では、ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナの『キュービズムとそのほかのイスマ』や、ギリエルモ・デ・トーレの『ヨーロッパの前衛文学』がそれである。そうこうするうちに、パリでは、自己破壊をもくろんだダダイズムの廃墟に、今世紀で最後ながら、いちばん重要な詩と芸術の運動となるはずのシュルレアリズムが生まれたのである。

未来主義の美学とキューバ的なものとの混淆

作者自身も指摘しているように、『エクエ・ヤンバ・オー』の第一章には、「あまりにも頻繁に前衛主義が正体をあらわしており、まったく冷や汗ものである」。ここでいう前衛主義とは、主として未来主義を指している（以下同じ）。

要するに、新しい文学は——前衛的になるようにつとめると同時に、ナシヨナリズム的でなければならなかった。それが問題だった。前衛主義とは、しやにむに伝統を断ち切ることを意味し、ナシヨナリズムとはすべての伝統を尊重することにあつたので、そうした目的を達することは容易ではなかつた。わたしは若いハムレットのように懊悩しながらひとり言を洩らし、相反するも

のを融和させようと思ったが、どちらがプラスに振れ、どちらがマイナスに振れるかわからない状態にあり、けつきよく両者を混淆させたものを生みだすしか方法はなかった。これから読者がひもとかれる本は、うまく書けている箇所もなくはないが、キューバ的なものと前衛的なものが混在するかたちにならざるをえなかったのである。

海賊版の海賊版

一九三三年、マドリードのエスパーニャ社から出た『エクエ・ヤンバ・オー』には、カルペンテイエールの「序」はついていなかった。ところが、四十四年がたった一九七七年、作者承認のもとで、ハバナの〈芸術と文学〉社から出た版以降、必ず「序」が付されるようになった。その理由については、作者自身がにがにがしくこう語っている。

一九六八年のある日、ザナンドゥー Xanandu というブエノスアイレスの海賊版の出版社が、誤字や脱字、数行にわたる脱落だらけの、おぞましい版をラテンアメリカ市場に流した。おまけに、本文の末尾には、「一九二七年八月一日―九日、ハバナ刑務所」と小説を書いた日付と場所を記していたのだが、それを勝手に省いている。これはどう見ても、『光の世紀』（一九六二）のあとに出た最新作だと思わせて、読者をたぶらかそうとするたくらみである。この版はすべての中南米諸国に出まわり、大西洋を越えてスペインの書店まで席捲した。あげくのはて、思い出したくもない名前のウルグアイの出版社が、海賊版の海賊版を出すことになった。

周知のとおり、スペイン語圏のラテンアメリカは、北はメキシコから南はチリ、アルゼンチンに至るまで、さらにカリブ海沿岸国を含めると、二十カ国に及ぶので、作者の目がゆきとどかないところで、おのれの作品が勝手に出版されることは大いに考えられることである。カルペンティエールは、それにもほどがあると言っているのだ。けれども、ウルグアイで海賊版の海賊版が出るに及んで、堪忍袋の緒が切れたのもむりはない。

このほかにも、「序」には、作者の自伝的な要素が取りこまれていること、つまり父親の寛大な計らいで、黒人のメネヒルドとは幼い頃の遊び友だちだったこと、そして家族ぐるみの付き合いがあつたという興味深い事実が記されている。

また、作品の末尾近くで描かれている秘密結社^{フリーメイソン}、もしくはヴードゥー教の加入儀礼については、『ラ・レバンバランバ』と『アナキリエの奇蹟』というバレエ作品の台本と音楽の仕事をいっしょにおこなった、作曲家アマデオ・ロルダンをともなつて列席した儀式の、取材ノートがもとなつていゝる」ことを明らかにしている。

そうしたフィールドワークは、第二作の長篇小説『この世の王国』（一九四九）や『失われた足跡』（一九五三）でも生かされることになる。前者を執筆するにあたっては、一九四二年に、妻のリアとフランス人俳優ルイ・ジューヴェ同伴のもと、ハイチの黒人初の皇帝アンリ・クリストフの夢の跡であるサンスーシ（無憂）宮、ラ・フェリエール城塞、カプ市、ナポレオンの妹、ポーリーヌ・ボナバルトの旧居などを訪れた。いずれも、主人公マツカンダルが作品のなかで逃亡奴隷から身を起こし、変幻自在のヴードゥー教祭司になつて活躍する舞台にほかならない。

そして、『エクエ・ヤンバ・オー』の「序」と同様、作者が批評家として力量を存分に発揮した、

『この世の王国』の「序」をひもとかれるとお分かりのように、作者は、〈現実の驚異的なもの〉
real maravilloso がハイチにも存在することを発見するに到るのである。

想い出すことも

本書は、二〇〇二（平成十四）年三月三十一日、〈関西大学東西学術研究所 訳注シリーズ8〉として、同大学出版部から刊行されたものの改訳版である。

このたび水声社の格別のご好意により再刊するにあたり、旧訳に大幅な加筆修正をほどこし、面目を一新したつもりだが、はたして仕上がりはどうであろう。改訳が功を奏していることを祈るばかりである。

思えば、一九八五年、恩師木村榮一先生のお声がかりで、カルペンティエール『この世の王国』翻訳のお手伝いをする事になった。これは、まずサンリオ文庫に収められた。そののち、一九九二年、水声社から単行本として出していただくという幸運に恵まれた。そうしたえにしが今回の『エクエ・ヤンバ・オー』の刊行に繋がっているように思われる。

水声社編集部の飛田陽子氏には、現代メキシコ・シティーを舞台にしたスラップスティックな老いらくの恋物語、フアン・パブロ・ビジャロボス作『犬売ります』（二〇二〇）の出版のときと同様、多大なお力添えをいただきました。この場をお借りして衷心より御礼を申しあげます。

また、永年、アレホ・カルペンティエールの人と作品を研究しておられる、神戸市外国語大学専任講師の穂原^{あきはら}三佳氏からは、段ボールひと箱ほどの貴重な資料を拝借いたしました。そのなかで、マドリードのアカル社版の註釈つき『エクエ・ヤンバ・オー』（二〇一〇）は大いに助かりました。イベ

ロアメリカカーナ社のモンセラット・ベセリル・ガルシアとアンヌ・マリー・ブルノーの共著『キューバ黒人語彙集 十九世紀の言葉と証言』(二〇一六)とともに、参考にさせていただきました。先生には、ご多忙中にもかかわらず、ご協力をたまわり、ご厚情、身に沁みました。

最後に、少し買いかぶりかもしれないけれど、「カタルーニャ人のドナルド・キーン」のような存在になりつつある、畏友イヴァン・ディアス・サンチョ氏には、アレホ・カルペンティエールの文体の難解な箇所を解きほぐしていただきました。ここに記して謝意を表します。

関西大学出版部から『エクエ・ヤンバ・オー』の元版を出して五年がたった二〇〇七年、NHKドラマ番組部オーディオドラマ班の方から電話があり、小説をラジオドラマ化して、いまでも続いている〈青春アドベンチャー〉というFM番組で放送したい旨の問い合わせがあった。光栄なことなので即承諾したけれど、いかにもラテンアメリカらしい混沌とした事情により、お流れになってしまった。まさに夢まぼろしのように消えた〈青春アドベンチャー〉であった。

底本などについて

本書は『Alejo Carpentier: *Ecue-Yamba-O! Historia afro-cubana* (en la portada dice *novela afro-cubana*). Madrid, Editorial España, 1933. Ilustrada. の全訳である。ただし、巻末の〈語彙集〉Glosario は割愛させていた。

この初版本を底本にして、以下のほかの版、仏訳を適宜、参照させていただいた。

Alejo Carpentier: *Ecue-Yamba-O*. Barcelona, Ediciones Alaguara S.A., 1982.

——, *Ecue-Yamba-O. En obras completas de alejo carpentier volumen I*, México, D.F. siglo veintiuno

editores s.a., 1983.

——, *¡Ecue-Yamba-O!* Serie Alejo Carpentier - Narrativa completa. Madrid, Ediciones Akal S.A., 2010.

——, *Ekoué-Yamba-O* suivi de *Histoire de lunes*. Paris, Editions Gallimard, 1988. Traduit de l'espagnol par René L.-F. Durand.

二〇二一年七月六日

平田渡